

富田林市文化財調査報告51

平成23年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2012. 3

富田林市教育委員会

は じ め に

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。そのなかでも、中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡も多く存在することから、古くから人びとの営みが行われていたことがわかっています。

しかし、このような事実の蓄積は多くの開発のなかから生まれてきたものであり、発掘調査による新たな発見と引き換えに、遺跡の破壊がなされてきたことを看過することはできません。

本書で報告しました中野遺跡と中野北遺跡は、市内を代表する集落跡であり、本市にとって貴重な宝であります。ともに小規模の調査でしたが、中野遺跡では、国史跡に指定されている新堂廃寺跡との関係性を示す瓦をあらためて確認するなど、重要な成果を得ることができました。これらを次の世代に引き継ぐために、発掘調査で得られた見地を有効に活用されることを、望んでやみません。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました地元住民のみなさまや関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

富田林市教育委員会

教育長 堂山博也

例　　言

1. 本書は、平成23年度国庫補助事業「市内遺跡緊急発掘調査事業」の報告書である。
2. 本事業は、富田林市教育委員会文化財課が平成23年4月1日から平成24年3月31日にかけて実施した。現地調査は、同課職員 中辻 亘、角南辰馬が担当し、同課職員 山崎紳司、石田朋子、同課非常勤職員 桑本彰子がこれを補佐した。出土遺物の整理作業は、同課非常勤職員 粟田 煙が担当した。
3. 本書には、整理作業等の都合から、平成23年12月31日までに現地調査が終了したものを作成した。また、前年度の調査で整理作業が完了したものについても、あわせて報告した。
4. 本書の作成にあたっては、第2章第3節、第3章第2節を粟田が執筆した。それ以外の執筆および編集を角南が担当し、石田がこれを補佐した。
5. 平成23年度の現地調査および整理作業には、以下の者の参加を得た。（50音順、敬称略）
上田伸子、柏 健一、小島扶左子、豊島享志、前野美智子
6. 本書で使用する標高は東京湾標準潮位（T.P.）で表示している。現地調査における土色の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編）を使用した。

目 次

第1章 平成23年の調査状況	1
第2章 中野遺跡(NN2010-1)の調査	
第1節 調査の経緯	5
第2節 現地調査の成果	5
第3節 出土遺物	5
第3章 中野北遺跡(NNN2010-2)の調査	
第1節 現地調査の成果	13
第2節 出土遺物	15

挿 図 目 次

図1 市内遺跡分布図	3
図2 本書で報告する調査地の位置(1/4,000)	4
図3 トレンチ位置図(1/200)	6
図4 土層断面柱状図	6
図5 土師器、丸瓦	8
図6 平瓦	10
図7 平瓦	11
図8 トレンチ位置図(1/1,000)	13
図9 トレンチ平面図(1/200)	14
図10 土層断面柱状図	14
図11 遺構平面図および断面図(1/40)	14
図12 I・II層、排土、土坑1(SK1)出土遺物	16
図13 上坑2(SK2)出土遺物	17
図14 土坑2(SK2)、溝(SD1)出土遺物	18

表 目 次

表1 発掘届(通知)受理件数	1
表2 発掘調査一覧	2
表3 試掘調査一覧	2
表4 出上遺物一覧表	15

写真目次

写真 1 1989年調査区との位置関係	6
写真 2 調査前の状況（南東から）	13

図版目次

図版 1	（上段）中野遺跡 土層断面状況（北東から） （中段）中野遺跡 土層断面状況（南東から） （下段）中野遺跡 IV層掘り下げ部分（南東から）
図版 2	（上段）中野北遺跡 調査区北半分（北から） （下段）中野北遺跡 調査区南半分（東から）
図版 3	（上段）SK 1 土層断面状況（北から） （中段）SK 2 拡張前の土層断面状況（北から） （下段）SK 2 拡張後の完掘状況（北から）

第1章 平成23年の調査状況

平成23年1月から12月における文化財保護法第93条・第94条に基づく発掘届・通知は、表1のとおりであった。件数については第93条・第94条とも約10件増加し、それに伴って事前調査として実施した発掘調査の件数（表2）も増加した。

これらのうち国庫補助事業として実施したのは、中野北遺跡（番号6）と甲田遺跡（番号17）の調査の2件である。前者は範囲確認調査として行ったもので、第2章で報告する。後者については、個人住宅の建設に伴う本調査で、土坑等の遺構を確認した。現在整理作業中のため、次年度報告したい。また、前年度事業として実施した中野遺跡の整理作業が完了したので、第3章で報告する。

国庫補助事業以外では、喜志遺跡（事前調査は番号5・本調査は番号12）、甲田遺跡（事前調査は番号8、本調査は番号14）、畠ヶ田遺跡（番号16）の3件の本調査を実施した。これらは平成23年度内に別途報告書を刊行する予定である（富田林市文化財調査報告48～50）。

上記以外についても、栗ヶ池遺跡（番号2）、中野遺跡（番号10）、喜志遺跡（番号26）、桜井遺跡（番号29）の4件で遺構を確認した。栗ヶ池遺跡は、事前調査で対象部分の調査が完了のため、また中野遺跡と喜志遺跡は設計変更によって遺跡保護が図られたため、本調査は実施しなかった。桜井遺跡については、平成24年2月より本調査を実施している。

ところで、本市では開発指導要綱に基づき300mを超える開発事業などにおいて、事業者の依頼と協力を得ながら、埋蔵文化財の有無について事前に確認するための試掘調査を実施している。平成22年は表3に示したとおり、計14件の試掘調査を行った。これについても前年度に比べて増加となったが、新たな埋蔵文化財包蔵地の確認はなかった。

表1 発掘届（通知）受理件数

	発掘届出（93条）				発掘通知（94条）				合計
	事前	立会	慎重	小計	事前	立会	慎重	小計	
ガス		3	39	42					0 42
個人住宅	9	20	12	41					0 41
分譲住宅	2	1	1	4					0 4
その他建物	7	2		9	2	1			3 12
共同住宅	1			1					0 1
店舗	3			3					0 3
鉄道				0					0 0
宅地造成	3			3					0 3
その他開発	1		1	2		1			1 3
農業関係				0					0 0
電気				0			2	2	2 2
兼用住宅				0					0 0
道路				0	1	5			6 6
農業基盤	2	1		3					0 3
電話通信			1	1					0 1
水道				0			9	9	9 9
下水道				0		8	3	11	11 11
小計	28	27	54	109	3	15	14	32	141

表2 発掘調査一覧

番号	調査日	所在地	遺跡名	調査原因	調査面積(m ²)	調査結果	担当者
1	1月26日	若松町西二丁目	中野遺跡	共同住宅	1.2	遺構・遺物なし	角南
2	1月27日～ 2月1日	桜井町二丁目	栗ヶ池遺跡	その他建物	14.4	ピットを確認	角南
3	2月22日	甲山二丁目	甲田遺跡	店舗	6.6	遺構・遺物なし	角南
4	2月28日	昭和町二丁目	新堂南遺跡	その他建物	3	遺構・遺物なし	角南
5	3月22日、 5月25日	喜志町三丁目	喜志遺跡	その他建物	24	土坑、溝を確認	中辻、 角南
6	3月22日～ 3月30日	中野町三丁目	中野北遺跡	範囲確認(国庫)	123	ピット、土坑、 溝を確認	角南
7	4月11日	錦織中二丁目	喜志遺跡	共同住宅	16.5	遺構・遺物なし	角南
8	5月13日	甲田一丁目	甲田遺跡	農業基盤	40.8	ピット、溝を確認	角南
9	5月27日	本町	堀ノ内遺跡	その他開発	6.5	遺構・遺物なし	角南
10	5月30日	中野町一丁目	中野遺跡	個人住宅	4.8	溝を確認	角南
11	6月6日	昭和町二丁目	新堂南遺跡	その他建物	7	遺構・遺物なし	角南
12	6月14日～ 6月28日	喜志町三丁目	喜志遺跡	その他建物	28	ピット、溝等を確認	角南
13	6月20日	西板持町五丁目	西板持遺跡	その他建物	1.8	遺構・遺物なし	中辻
14	6月27日～ 7月11日	甲田一丁目	甲田遺跡	農業基盤	83	ピット、溝等を確認	角南
15	6月28日	西板持町五丁目	西板持遺跡	兼用住宅	3.5	遺構・遺物なし	中辻
16	7月11日～ 8月31日	若松町一丁目	畑ヶ田遺跡	その他建物	760	ピット、土坑、 溝等を確認	角南
17	7月22日～ 8月19日	甲田一丁目	甲田遺跡	個人住宅(国庫)	189	土坑等を確認	中辻
18	9月12日	寿町二丁目	毛人谷遺跡	宅地造成	6.8	遺構・遺物なし	角南
19	9月15日	西板持町四丁目	西板持遺跡	個人住宅	1.3	遺構・遺物なし	角南
20	9月16日	大字龍泉	佐伯川B3地点遺跡	個人住宅	1.8	遺構・遺物なし	角南
21	10月7日	五軒家一丁目	五軒家遺跡	その他開発	6	遺構・遺物なし	角南
22	10月18日	昭和町二丁目	新堂南遺跡	共同住宅	4.8	遺構・遺物なし	角南
23	11月22日	甲田一丁目	甲田遺跡	個人住宅	1.3	遺構・遺物なし	角南
24	11月24日	西板持町七丁目	西板持遺跡	分譲住宅	0.6	遺構・遺物なし	角南
25	11月28日	大字伏見堂	西野々古墳群	個人住宅	1.6	遺構・遺物なし	角南
26	12月1日	木戸山町	喜志遺跡	その他建物	1	ピットを確認	角南
27	12月5日	中野町二丁目	中野北遺跡	個人住宅	3.8	遺構・遺物なし	角南
28	12月9日	西板持町六丁目	西板持遺跡	店舗	1	遺構・遺物なし	角南
29	12月26日	川面一丁目	桜井遺跡	宅地造成	13	ピット等を確認	角南
30	12月27日	若松町西三丁目	中野遺跡	その他建物	5	遺構・遺物なし	角南
31	12月27日	西板持町五丁目	西板持遺跡	店舗	200	遺構・遺物なし	角南
32	12月27日	西板持町七丁目	西板持遺跡	宅地造成	1.2	遺構・遺物なし	角南

表3 試掘調査一覧

番号	調査日	所在地	調査原因	調査面積(m ²)	調査結果	担当者
1	1月21日	西板持町一丁目	個人住宅	立会	遺構・遺物なし	中辻
2	2月7日	木町	共同住宅	4.8	遺構・遺物なし	角南
3	2月21日	寿町一丁目	個人住宅	2.6	遺構・遺物なし	角南
4	2月22日	寿町二丁目	共同住宅	2.6	遺構・遺物なし	角南
5	3月8日	北大伴二丁目	宅地造成	2.4	遺構・遺物なし	角南
6	3月14日	甘山一丁目	宅地造成	3	遺構・遺物なし	中辻
7	4月4日	川向町	店舗	2.2	遺構・遺物なし	角南
8	6月13日	寿町二丁目	個人住宅	4.2	遺構・遺物なし	角南
9	7月29日	川面町一丁目	その他建物	5	遺構・遺物なし	角南
10	8月10日	伏山一丁目	個人住宅	0.7	遺構・遺物なし	中辻
11	9月26日	津々山台	店舗	2	遺構・遺物なし	中辻
12	10月3日	大字喜志	その他建物	立会	遺構・遺物なし	中辻
13	10月24日	西板持町四丁目	個人住宅	立会	遺構・遺物なし	角南
14	11月28日	青葉丘	その他建物	7.6	遺構・遺物なし	中辻



図1 市内遺跡分布図



第2章 中野遺跡(NN2010-1)の調査

第1節 調査の経緯

中野遺跡は、石川左岸の中位段丘上に位置する集落跡である。遺跡内である中野町二丁目において個人住宅の新築が行われることになり(図2)、平成22年9月に文化財保護法第93条に基づく発掘届出書が提出された。

今回建築の対象となった現場は、都市計画道路狭山河南線に面している。この道路は1987~89年の3年間わたって大阪府教育委員会と富田林市教育委員会による発掘調査が実施されおり、ほぼ全面にわたって遺構が確認された。整理作業が未完の状態となっているため、調査成果の全貌は明らかになっていないが、西側で「大溝」、東側で「谷遺構」が検出されており、両者とも多量の瓦を含しているとのことである(栗山2001)。調査時に撮影された空中写真をみると、今回の調査地は後者の谷遺構の延長上にあたり、かつ建築範囲が谷遺構の中に収まることを想定できた(写真1)。

これを踏まえて開発者と協議を行ったところ、その想定と一致するように、事前に実施されたボーリング調査で、地盤が軟弱であり柱状改良が必要との結果が出ていることを知らされた。現況地盤より1.5m以上掘削すると建築に影響が出るとのことであったため、調査の掘削深度は状況に応じて判断することになった。

第2節 現地調査の成果

調査時の現場の状況は更地であったが、これは南側に面する歩道の高さに合わせるように盛土がなされたためで、それ以前は歩道よりも低い畠地であったようである。調査地の現況面および北側に隣接する畠には、瓦が散布している状態であった。これらの遺物については、後述するIV層に含まれていたものが、後世に掘り返されて表出したものと考えられる。

調査方法については、谷遺構の北側の肩部を確認することを目指し、かつ廃土の置き場を確保するために、建築範囲の東辺に沿う南北方向のトレンチを設けた。層序は現況面から順に、I層:盛土(厚さ80cm)、II層:耕作土(20cm)、III層:床土(6cm)、IV層:灰黄褐色粘質土である。IV層には多くの円礫とともに瓦片が含まれていたほか、湧水も認められたことから、調査前の想定通り、谷遺構の埋土の一部と考えられる。トレンチ南端においてIV層を約45cm掘り下げ、事前の協議で限界としていた深さまで追求したが、同一の層が続く状況であった。トレンチ内で谷遺構の肩部は検出できず、トレンチ全面にわたってのIV層を検出したため、建築範囲が谷遺構の中に収まっていることが確実となった。軟質な盛土や湧水で掘削に危険が伴うこと、その後の建築への影響などを考慮して、谷遺構の底面の追求や拡張は行わなかった。

第3節 出土遺物

今回の調査では、完形品の土師器の小皿1点のほか、土師器片が4点、丸瓦が11点、平瓦が33点、サヌカイト剥片が3点、サヌカイト石核が2点出土している。これらの資料には、調査地から出土した資料だけでなく、北側に隣接する畠で採集したものも含まれている。調査地から出土した資料はすべてIV層からの出土で、土器類のすべてと、丸瓦9点、平瓦27点、サヌカイト石核がある。採集品には丸瓦1点と平瓦6点、サヌカイト剥片がある。

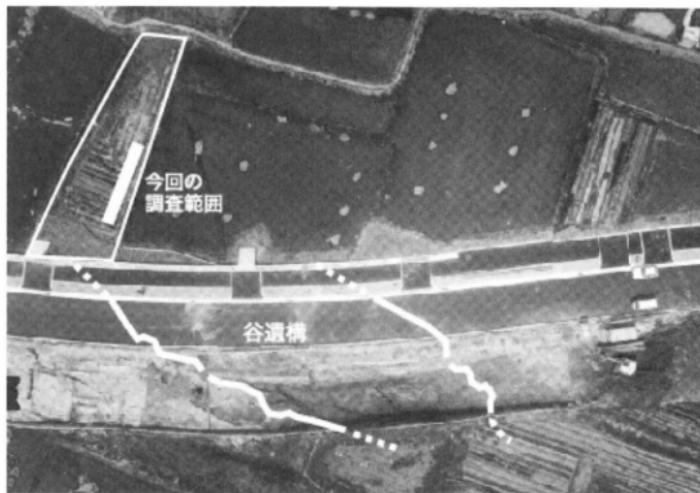


写真1 1989年調査区との位置関係

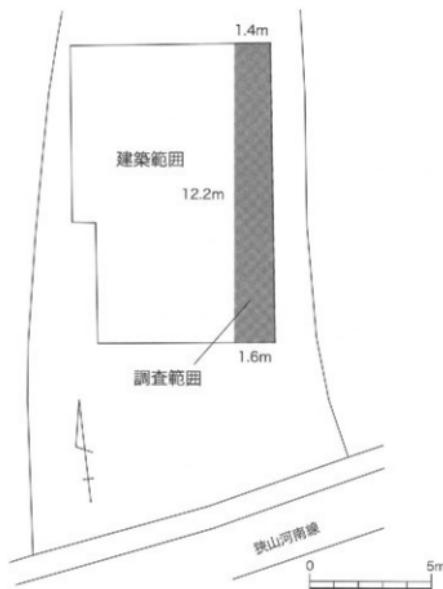


図3 トレンチ位置図 (1/200)



図4 土層断面柱状図

今回の調査区はすでに述べられているとおり、1989年の調査で明らかになった谷造構の延長位置にあり、ここでIV層と報告された層は谷造構の埋土の一部である可能性が高いだけでなく、さらにこの北側の層の採集品も、この谷造構に含まれていた可能性が高いと考えられている。そのため調査出土品と採集品をあえて図中に区別することなく報告している。なお、図示した資料のうち、土師器小皿と丸瓦のすべて、平瓦の図6-9～13、15、17、18、図7-19、20は調査地出土資料、図6-14、16、図7-21は採集品である。

以下、土師器小皿、丸瓦、平瓦の順に報告する。

土器（図5-1）

土師器の小皿以外は、小破片のため器種も分からぬ。小皿（図5-1）は、ほぼ平らな底部からつまみあげるように開く口縁部をもち、口径9.3cm、器高1.5cmを測る。

丸瓦（図5-2～8）

丸瓦は玉縁式なのか、あるいは行基式なのかの判断のつくものが少ないが、（2）（3）が玉縁式丸瓦、（8）は行基式丸瓦と推測できる。

（2）は側面も端面も残っていないにも関わらず、玉縁式丸瓦と判断したのは、造瓦器具の痕跡が確認されたからである。型木のプロポーションはまったく分からぬものの、玉縁式丸瓦用の型木に多く見られる器具痕跡の一つである長軸方向にのびる長方形の突出痕が認められるからである。凸面はスリ消されているために叩き目の有無は分からぬ。凹面には縦糸34本×横糸34本／3cmの織り目の布目が観察できる。また、残存部位の上端には、布筒にするための縫い目なのか、あるいは破れ目なのか判断つかない痕跡が認められる。布筒の織り目と縫い目、あるいは破れ目の様子、そして型木に観察できる造瓦器具痕を合わせ考えると、新堂廃寺出土瓦に確認された型木I 3 ②8（細種）を使用して製造された（栗田2005）、玉縁 I 332 Za [J1b] 群「布袋ホキ縁2」とした丸瓦に類似していることが指摘できる。もしこの指摘が正しければ、この丸瓦は、玉縁 I 332 Za [?] 群「布袋ホキ縁2」と表記されることになる。

（3）は凹面側にみられる筒部と玉縁部の境目の状況から瓶型の型木を使用して造られた玉縁式丸瓦と考えられる。凸面はスリ消されているために叩き目の有無は分からぬ。凹面には縦糸24本×横糸20本／3cmの織りの布目が観察できる。この布は、縦糸の太さはほとんど一定であるが、横糸に太い糸と細い糸が混在するという特徴からみると、やはり新堂廃寺の出土瓦に使用された「布レ」としたものに類似する。さらにこの「布レ」が、（3）にみるような筒部と玉縁部の境目に明瞭な段のない瓶形の型木に被せられている例の多いことと、胎土の類似性も合わせ考えると、やはりこの玉縁式丸瓦も新堂廃寺出土瓦の玉縁 I 322 Za [J1b] 群とした丸瓦にきわめて類似することが指摘できる。もしこの指摘が正しければ、この瓦は玉縁 I 322 Za [?] 群、「布袋レ玉縁0」と表記されることになる。

（4）は凸面側からみて左側縁と広瀬面が残る丸瓦である。凸面はスリ消されているために叩き目の有無は分からぬ。凹面には縦糸36本×横糸40本／3cmの織りの布目が観察できる。広瀬部の凹面側には端面から3.2cmの範囲に横方向のヘラ削りによる面取りが施されている。側縁部も凹面側に1.5cmの範囲で面取りが施されている。

(5) は凸面側からみて左側縁が残る丸瓦である。凸面には縦方向の綱目が観察できるが、叩き目の原体はスリ消されているため分からない。凹面には縦糸36本×横糸36本／3cmの織りの布目が観察できる。側縁部も凹面側に1.5～2.0cmの範囲に面取りが施されている。

(6) はほぼ中央部分だけが残存する丸瓦である。凹凸両面とも摩滅が著しく、調整痕も布の織り目も数えられない。ただし、布筒にするための縫い目と破れ目が観察できる。

(7) は凸面側からみて右側縁と広端面が残る丸瓦である。凸面は縦方向のヘラ削り調整が施されている。凹面には縦糸36本×横糸34本／3cmの織りの布目と糸切り痕が観察できる。広端面の凹面側には端面から6.8cmの範囲に横方向のヘラ削りによる面取りが施されている。側縁部も凹面側に2.0cmの範囲で面取りが施されている。

(8) は行基式の丸瓦で、凸面側からみて左側縁と狭端部が残る。凸面はかすかに縄目叩きが観察されるが、叩き目原体はスリ消されているため分からない。凹面には縦糸26本×横糸20本／3cmの織りの布目が観察できる。狭端部の凹面側には端面から0.8cmの範囲に面取りが施されている。側縁部も凹面側に0.8cmの範囲で面取りが施されている。

平瓦（図6-9～18・図7-19～21）

平瓦は、(9)だけが桶巻き作りで、他はすべて一枚作りである。

(9) は、凹面側から見て左側縁部と広端部が残る平瓦である。凸面に正格子叩きが施されている。叩き板の大きさは分からないが、正格子は叩き板の中央では、ほとんどが約0.6cm四方の正格子として認められる。ただし両端ではその限りではない。格子3個分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が2.7cm、横2.3cmである。この叩き板には格子の3升分に、見かけ上の横方向に隣接して傷を認める。凹面には縦糸26本×横糸28本／3cmの織り目の布筒が使用されている。粘土板の重ね目は「Z型」である。広端部の凹面側には端面から約1.5cmの範囲に横方向のヘラ削りによる面取りが施されている。側面は分割後、凹凸両面とも面取りが施されている。叩き板と布筒の状況、さらには胎土も合わせ考えると、この瓦は、新堂廃寺出土の平瓦Ⅱ0Bk群「布袋夕平0」とされた平瓦に類似することが指摘できる。新堂廃寺出土のこの種の平瓦では、叩き板の傷の進行具合から2段階の時間差のあることが分かっているが、それからみると(9)は傷の数の少ない0段階としたものに該当する。

(10) は叩き板の大きさは不明であるが、長方形の板に右撚りの2種の綱を合計13本巻きつけていると推測できる。綱は、太い方が「6～8粒／5cm」、細い方が「9～10粒／5cm」の撚りがかかるもので、中央に1本だけ細い綱を置き、その両脇にほぼ等間隔に6本ずつ太い綱を配する。叩き目は短辺に直交する方向に叩き縮められている。凹面側には縦糸20本×横糸22本／3cmの織りの布と糸切り痕が明瞭に観察できる。片端部は凹面側に面取りされている。この平瓦の叩き板と布、胎土を合わせ考えると、新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2am群「布ツ」とされた平瓦に類似することが指摘できる。新堂廃寺出土のこの種の平瓦には、綱目の乱れ具合から2段階の時間差のあることが分かっているが、(10)は乱れの生じていない0段階に該当する。

(11) は叩き板の大きさは不明であるが、長方形の板に「10～12粒／5cm」の右撚りの綱をほぼ等間隔に巻きつけたものと推測される。叩き目の重ね目が観察できないので、現状で観察できる綱を

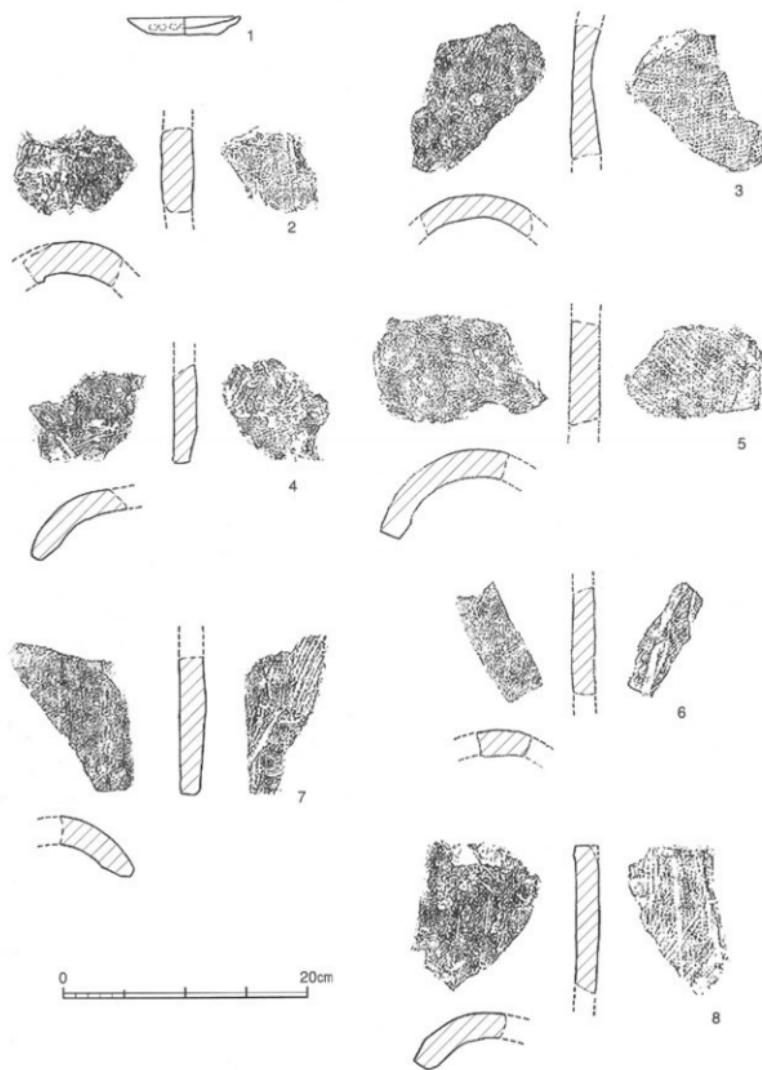


図5 土師器、丸瓦

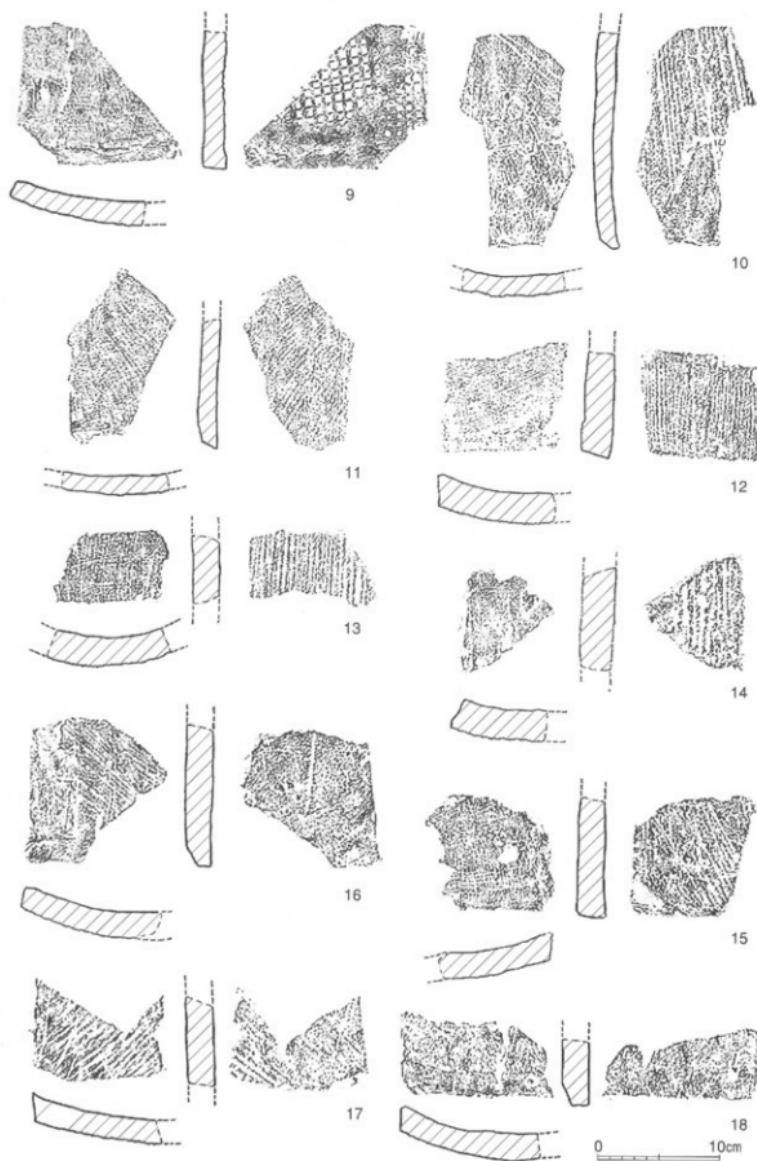


图 6 平瓦

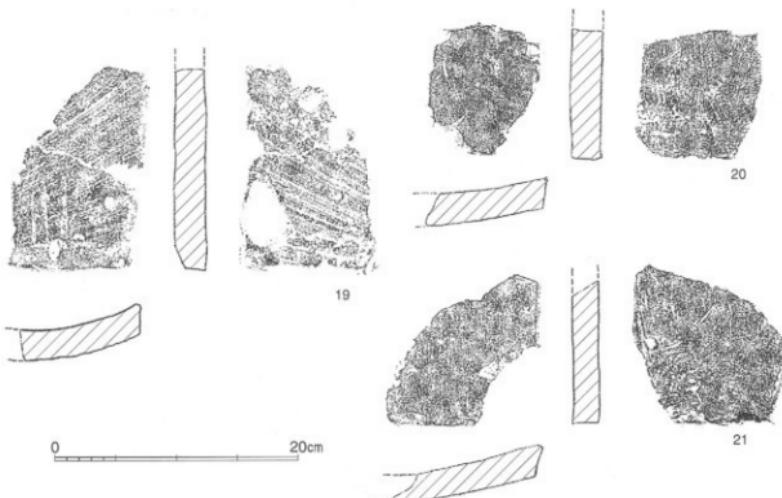


図7 平瓦

数えると16本以上が巻き付けられた叩き板である可能性が高い。縄目叩きは短辺に直交する方向に叩き締められている。凹面側には縦糸20本×横糸24本／3cmの織りの布が観察される。凹凸両面に糸切り痕が観察できる。片端部は凹面側に面取りされている。この平瓦の叩き板と布、胎土を合わせ考えると、新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2au群「布ト」とされた平瓦に類似することが指摘できる。新堂廃寺出土のこの種の平瓦では叩き板に縄が17本巻き付けられていることが分かっている。

(12)の叩き板は、(11)と同じものが使用され、短辺に直交する方向に叩き締められている。(12)の例からみると長方形の叩き板には、17本の縄が巻き付けられていたことが分かる。凹面の布は同じ叩き板を使用した(11)よりも細かい織りの布で、縦糸30本×横糸32本／3cmの織り目が観察できる。凹面側の片端部と側面部は面取りが施されている。この平瓦の叩き板と布、胎土を合わせ考えると、新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2au群「布ト」とされた平瓦に類似することが指摘できる。

(13)の叩き板も大きさは不明であるが、長方形の板に「9～10粒／5cm」の右撚りの縄を14本、等間隔に巻きつけたものと推測される。縄目叩きは短辺に直交する方向に叩き締められている。凹面側には縦糸14本×横糸18本／3cmの織りの布が観察できる。

(14)の叩き板は、(13)と同じものが使用され、短辺に直交する方向に叩き締められている。凹面側には、縦糸26本×横糸22本／3cmの織りの布が観察できる。

(15)の叩き板も大きさは不明であるが、(13)(14)と類似する「9～10粒／5cm」の右撚りの縄を14本、等間隔に巻き付けたものを使用して、短辺に斜交する方向に叩き締められている。凹面側には縦糸16本×横糸12本／3cmの織りの布が観察できているが、この粗さは傷んだ結果の産である可能性が高い。端面側に面取りは施されていない。

(16)の凸面は、かすかに縄目叩きが施されていたことが分かるものの、摩滅しているために原体の観察ができない。凹面側には縦糸26本×横糸24本／3cmの織りの布が観察される。凹面には糸切り

り痕が観察できる。片端面と側面は凹面側に面取りが施されている。

(17)は図示した拓影では、凸面に縄目が観察できるように見えているが、凹凸両面に非常に太い糸切り工具を使用するために、縄目のように深く刻まれて見えているだけである。凹面側には縦糸30本×横糸24本／3cmの織りの布が観察される。側面に面取りは施されていない。

(18)は凹凸両面とも離れ砂使用のために調整が分からなくなっているが、凹面側の片端部は2cmの範囲は横方向にヘラ削りで面取りが施されているのは観察できる。

(19)は凹凸両面に糸切り痕が明瞭に残ると、器表面が荒れているために調整が分からない。片端部の凹面側は1.8cmの範囲に横方向のヘラ削りで面取りが施されている。側面もわずかであるが凹面側に面取りが施されている。

(20)(21)は凹凸両面ともナデ調整が施されている。ともに端面側には面取りが施されていないが、側面の面取りは(21)の凹面側にだけ観察できる。ただしその範囲はわずかである。

今回の調査区全域を包括して延長する、1989年調査の谷造構から出土した大量の瓦のうち、軒瓦類の一部はすでに紹介している(栗田2001)。中世の軒瓦が主であるが、実際には飛鳥時代から室町時代までのものが出土している。この谷造構からは、瓦以外にも塔の心礎石、仏像の光背らしき木製品などが一緒に出土したため、谷造構の近辺に、かつて寺院があったと想定され、「中野廃寺」と命名された。今回の出土瓦も当然のことながら、古代から中世にかけての所属時期をもつ。

ところで1989年調査の谷造構で出土した軒瓦のうち、飛鳥時代から奈良時代の軒瓦にみる瓦当文様に限れば、軒丸瓦は4種類、軒平瓦は2種類あり、それらのすべてが谷造構から約800m西に離れた新堂廃寺で使用された軒瓦と同種であることが分かっている。今回の調査では軒瓦の出土はなかったものの、丸瓦や平瓦にも新堂廃寺所用瓦と同じ造瓦の産になるもののが存在することが明らかになった。ただし、今回の調査で出土した資料はすべて奈良時代以降のもので、とくに新堂廃寺で天平期と比定されてきたものに限られる。丸瓦(2)(3)、平瓦(9)～(12)である。これら以外の瓦にも新堂廃寺出土瓦と類似するものがあるが、確実に同定できるものに留めた。

今回の報告では、出土総量の少なさから「中野廃寺」所用瓦の同定基準となるべき技術学的観察用語の整備ができなかった。1989年調査資料は出土状況に限界があるものの、出土量の豊富さから技術学的検討が可能であり、「中野廃寺」所用瓦の解明に、わずかでも期待がもてる。ただしそのためには、軒瓦の型式学的検討だけでは無意味であることは自明のことであろう。どれ位の量の新堂廃寺所用瓦が「中野廃寺」周辺に入っているのか、また、新堂廃寺の廃絶後、鎌倉期になって金堂跡に建ったお堂に所要された瓦との関係など、新堂廃寺、その後の「お堂」、そして「中野廃寺」の関係を解明するためにも、丸瓦・平瓦を含めた1989年の調査で出土した瓦資料の技術学的検討が急がれる。

註

1. 瓦資料観察のための用語は、新堂廃寺跡やオガニジ池瓦窯の瓦資料の観察用語と共通する。2003年に富田林市教育委員会から刊行された『新堂廃寺跡・オガニジ池瓦窯跡・お龜石古墳』(本文編)を参照されたい。

参考文献

- 栗田 薫 (2001) 「中野遺跡—中野廃寺—」島崎久恵(編)『第4回 摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け—11・12世紀の寺院の考古学的研究—』所収、貝塚(大阪), pp.127-132.
- 栗田 薫 (2005) 「新堂廃寺・オガニジ池瓦窯出土の研究」、山中一郎(編)『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガニジ池瓦窯出土の研究』(京都大学総合博物館平成17年度春季企画展示のための研究成果), 京都, pp.17-174.

第3章 中野北遺跡 (NNN2010-2) の調査

第1節 現地調査の成果

中野北遺跡は、石川左岸の中位段丘上に位置する集落跡である。北は栗ヶ池遺跡と桜井遺跡、南は前章で報告した中野遺跡に接する。本市では都市計画道路甲田桜井線の延伸を進めており、その工事に先立ち、2006年度から2010年度にわたって発掘調査を行ってきた。整理作業は現在も継続中であり、古代から中世にかけての遺構・遺物を確認している。今回の調査地は、そのうちの2009年度調査区の西側に位置する（図2）。トレントはL字形に設定し、北端と東端は2009年度のトレントと重複している（図8）。

層序はⅠ層：耕作土（厚さ20cm）、Ⅱ層：床土（8 cm）、Ⅲ層：黄褐色粘質土（2 cm）、Ⅳ層：地山である。Ⅲ層は上器片をわずかに含む包含層で、厚さも薄く一部でしか確認できなかった。なお、遺構検出は地山面で行った。

検出した遺構は、ピット10基と土坑2基、溝1条である。密集したピット群を検出している甲田桜井線の調査区とは異なり、遺構の分布は散漫な状況であった。ピットはいずれも検出面から浅く、最も深いものでも15cmほどしか残存していなかった。SP1とSP5については埋土に灰黄褐色の柱痕跡があり、その径はそれぞれ13cm、9cmであった。SD1はSK1埋没後に掘り込まれており、長さ約90cm、幅約20cm、深さ約2cmである。

SK1は、径約1.15mで深さは約85cmである。底面が径約30cmと窄まる断面形状である。SK2は、そこから南西へ約3m離れた位置で検出した。全体の半分以上がトレント外に広がっていたため、まずトレントの範囲内を調査してから、調査終了前に拡張した。しかし、トレント南側に接するU字溝の下へさらに広がっていたため、全体を調査することはできなかった。径約1.2m、深さ約60cmである。拡張後の埋土掘削時に、土坑の中心部に棒状の木が傾きながらも立っていることに気付き、途中で断面図を作成した。木は長さ約42cm、径約3cmであり、検出時は柱が腐って瘦せながらも残存したものと考えた。しかし、取り上げて観察すると、表面に加工痕はなく樹皮が残った状態であり、当初からこの太さであったと考えられる。その性格については不明と言わざるを得ない。

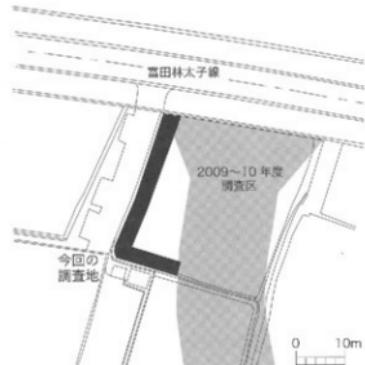


図8 トレント位置図 (1/1,000)



写真2 調査前の状況 (南東から)

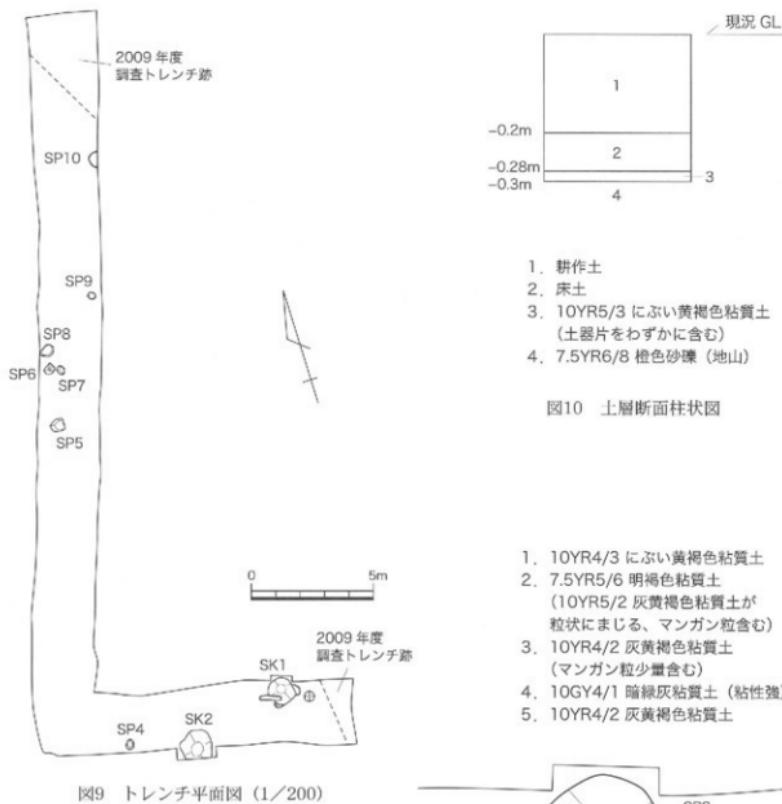


図10 土層断面柱状図

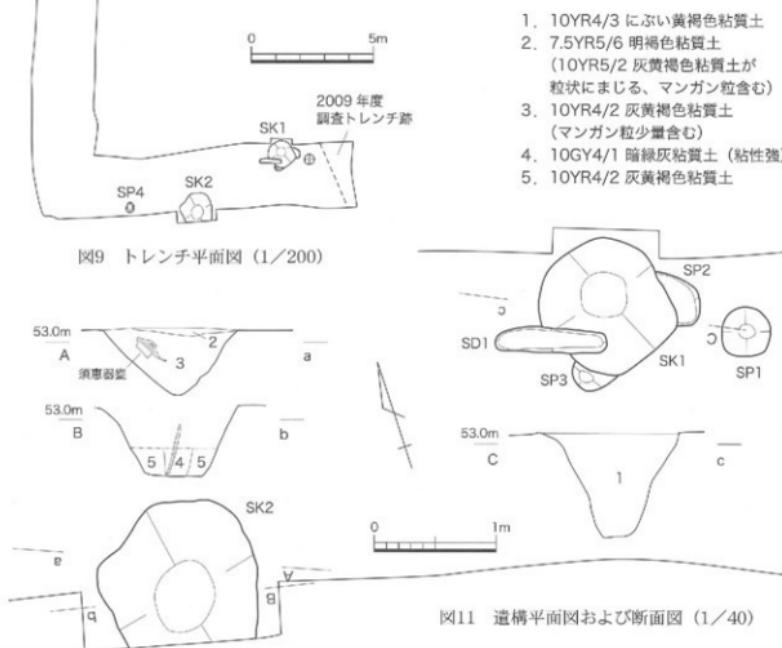


図11 遺構平面図および断面図 (1/40)

第2節 出土遺物

今回の調査の出土遺物には、須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器などの上器類のほかに、磁器、鉄釘がある。それらの出土状況は表4に示したとおりである。なお、この一覧表に記述のない遺構は、遺物が出土していないことになる。各遺構から出土した遺物は、あとで述べるように比較的に時期的なまとまりをもつ資料である。

ここでは、1. I・II層、および排土出土遺物と、2. 遺構出土遺物、に大きく分けてそれぞれの概要を示す。なお、堆積層は3層あるが、III層目の遺物は取りわけられていない。

1. I・II層、および排土出土遺物(図12-1~8)

ここに示した遺物は、機械掘削時に検出された遺物の中でもI層(耕作土)とII層(末土)出土のものと排土中から採集されたものであるが、比較的残存状況がよかつたので図化した。土器類は、後で述べる遺構出土遺物と同じく奈良時代後半から平安時代までのものがある。

須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器、鉄釘がある。

須恵器は、坏身(1)、小型壺の底部(4)、土師器は、皿(2)(5)、椀(3)、坏(6)、黒色土器には、椀(7)がある。黒色土器はB類である。鉄釘(8)は1点だけで、断面四角形のものであるが鏽ぶくれが著しいため、全体の形態は分からぬ。製塙土器は小破片のため、全体の形態は不明である。

2. 遺構出土遺物

土坑1出土遺物(図12-9~19)

須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器が出土している。

須恵器は小破片のため図化できなかったが、高台のある坏身、壺の台部片、壺あるいは壺の体部片などがある。

土師器は小皿(9)~(15)、椀(17)(18)、高坏の裾部(16)、土釜(19)(20)などがある。

小皿は、口径8~9cm前後のもので、口縁端部が丸くおさまるもの(9)、外側に水平にのびるもの(11)(10)、つまみあげるもの(12)、外反して尖り気味のおさまるもの(13)などのほかに、いわゆる「て」の字状口縁のもの(14)も認められる。底部は、丸底のもの(9)、尖り気味の丸底のもの(10)、平底に近いもの(11)(13)(14)のほかに、全体の形態が板状に近いもの(15)も認められる。

表4 出土遺物一覧表

遺構名	略号	層位	検査番号	出土遺物	備考
-	-	I~III層	図12-1~3	須恵器、土師器	図化したのはI・II層出土遺物
-	-	排土	図12-4~8	須恵器、土師器、製塙土器、黒色土器、鉄釘	
土坑1	SK1	埋土	図12-9~24	須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器	
土坑2	SK2	埋土	図13-25~53 図14-54~66	須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器	
ピット4	SP4	埋土	-	土師器	
溝1	SD1	埋土	図14-67	須恵器、土師器、白磁	

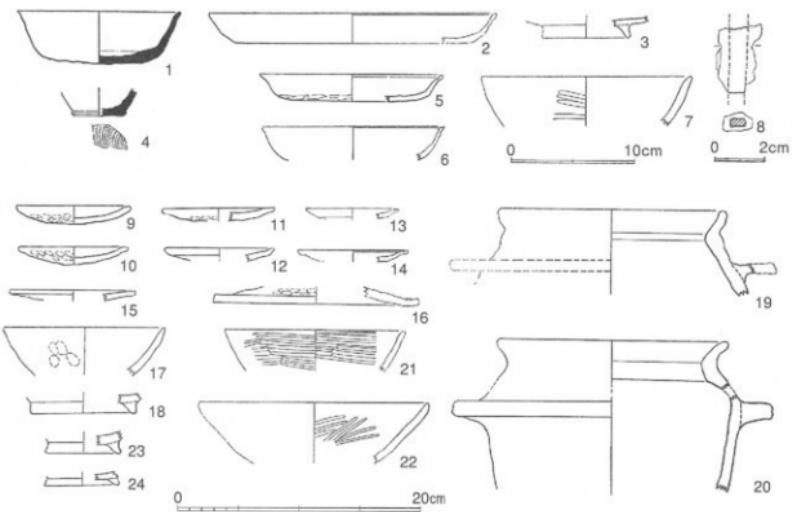


図12 I・II層、排土、土坑1(SK 1)出土遺物

高坏は、図化した裾部片(16)が1点出土しただけである。大きく聞く裾部をもつ。土坑1出土の他の遺物と比べると、古い時期のものが混入した可能性が高いと考えられる。

楕は、丸みをもつ体部から大きく聞く口縁部をもつ(17)と高台部片(18)がある。

土釜(19)(20)は、図化した以外にも数点出土しているが、すべて図化したものと類似して、口縁部が大きく外反し、大きな鉤をもつ形態のものである。

黒色土器は、楕(21)～(24)で、A類(22)(23)とB類(21)(24)の両方がある。体部も残存している(21)は内外面ともに横方向の暗文が、(22)は内面に斜方向の暗文が観察できる。

製塙土器は、小破片のため形態の分かるものではなく、特有の粗い胎土と器表面の荒れ具合から製塙土器と判断した。

以上の遺物をまとめると、土坑1から出土した遺物の所属時期は、8世紀代に比定すべき(16)のような高坏部を除くと、大半の遺物は11世紀前後に比定できよう。

土坑2出土遺物(図13-25～53、図14-54～66)

須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器が出土している。

須恵器には坏蓋(25)～(27)、坏身(28)～(32)、楕(33)(34)、壺(35)～(37)、甕(38)がある。

坏蓋は、口縁部と天井部の境目が不明瞭なドーム状の形態をもつもの(25)、わずかに丸みをもつ天井部に、屈曲してわずかに内傾気味に垂下する口縁部をもつもの(26)と、平らに成形された天井部から直角に下方へ折れ曲がる口縁部をもつもの(27)がある。前者の頂部には宝珠状のつまみが、後者には扁平なつまみが貼り付けられていたと推測できる。

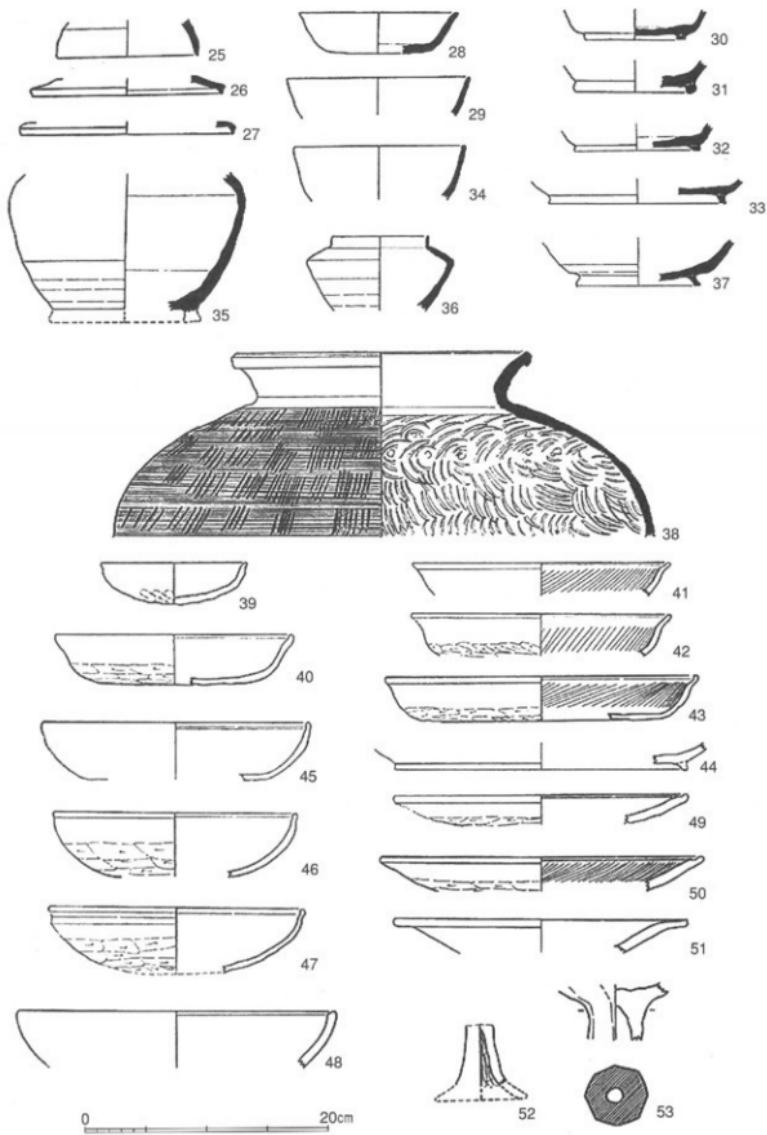


図13 土坑2(SK2) 出土遺物

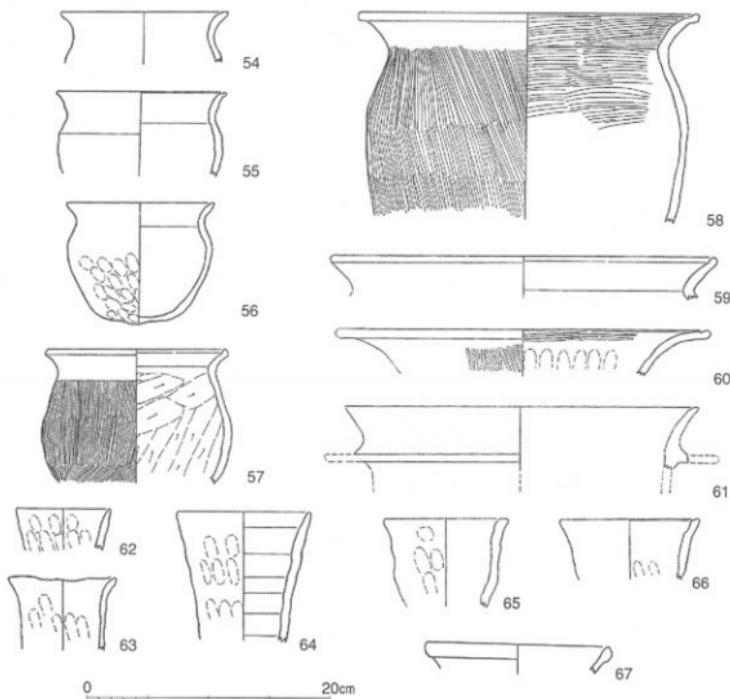


図14 土坑2(SK2)、溝1(SD1) 出土遺物

壺身は、平底で、体部から直線的に外傾する口縁部をもつもの(28)と高台の付くもの(30)～(32)がある。(29)は底部欠損のため高台の有無は分からない。

椀は、深い体部をもつもの(34)と底部に高台の付されているもの(33)があるが、ともに壺身とするにはサイズの大きなものを椀とした。

壺は、丸みのある肩部に最大径をもち、底部に高台が付されたもの(35)と、「く」の字状に屈曲して角張った肩部に短く直立する口頭部をもつもの(36)がある。(37)は底部のみ残存のため、全体の形態は分からず。サイズと高台部の状況から壺とした。

甕(38)は大きく張り出して膨らみをもつ体部に、屈曲して大きく開く口頭部をもつ。口縁端部は外端面に面をもち、その中央部が尖るような形態をもつ。体部外面には平行叩き調整が施された後、力抜き調整が施されている。

土師器には壺(39)(40)、皿(41)～(44)、椀(45)～(48)、高壺(49)～(53)、甕(54)～(60)、羽釜(61)がある。

壺は、小型で丸みをもつ底部から、ほぼまっすぐに立ち上がって口縁部にいたるもの(39)と、平底から、外反するように開きながら立ち上がって口縁部にいたるもの(40)がある。口縁端部は、前者がわずかに外方へつまみ出して尖り気味におさまるのに対して、後者は段を呈したのち、丸くおさまる。

前者はナデ調整下に指頭圧痕が残るが、後者の底部外面はヘラ削り調整、口縁部外面は横ナデ調整、それ以外はナデ調整が施されている。出土量は後者のほうが多い。

皿は、平底のもの(41)～(43)と高台の付されたもの(44)がある。前者は平底から、外溝するよう立ち上がった後、大きく開く口縁部をもつ。口縁端部は段を呈したのち、丸くおさまる。後者は底部しか残存していないので、体部から口縁部にかけての形態は不明である。平底の皿は、底部外面にヘラ削り調整、口縁部外面に横ナデ調整、それ以外はナデ調整が施されている。なお、内面には正放射状の暗文が一段施されている。

高杯は、杯部片(49)～(51)と脚部片(52)(53)がある。杯部片は丸みをもつ浅い皿状のもの(49)(50)と外傾したち大きく聞く口縁部をもつもの(51)がある。前者の口縁端部は段を呈した後、丸くおさまる。後者の口縁端部はわずかに上方にたちあがって尖る。前者的底部外面はヘラ削り調整、口縁部外面は横ナデ調整、それ以外はナデ調整が施されている。なお、(50)の内面には、正放射状の暗文が一段施されている。脚部片(52)は、裾部に向かってわずかに開き気味にのびる脚柱部から、一気に聞く裾部をもつ。古い時期のものが混入した可能性が高い。内面にはしばり目が明瞭に観察できる。

(53)の脚部片は一緒に出土している杯部片とほぼ同じ時期のものと考えられる。脚柱部は8面に面取りがなされている。

甕は、小型品(54)～(57)、中型品(58)、大型品(59)(60)といろいろな大きさのものがある。小型品の体部外面は、(56)のように指頭圧痕が目立つものもあるが、中型品や大型品は、刷毛目調整の施されたものも多い。(57)は外面に綫方向の刷毛目、内面にヘラ削り調整が施されている。(58)(60)は内外面ともに刷毛目が認められるが、外面は綫方向、内面には横方向に施されている。

羽釜(61)は長胴で、いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。

黒色土器は小破片で、図化できるものはないが、破片はすべてA類である。

製塙上器(62)～(66)は、すべて器壁の薄いものばかりで、全体の形態は筒状に近い。

以上の遺物をまとめると、土坑2の所属時期には、7世紀代に比定すべき須恵器の杯身(25)、土師器の杯(39)や高杯脚部(52)のようなものを除くと、大半の遺物は8世紀末～9世紀代に比定されよう。

ピット4出土遺物

土師器の小破片が1点出土しているだけである。所属時期はわからない。

溝1出土土器（図14-67）

須恵器、土師器、白磁が出土しているが、すべて小破片ばかりで、図化できたのは白磁の椀だけである。玉縁口縁をもつ白磁椀である。

溝1から出土した遺物のうち、所属時期の分かることは、白磁椀だけである。12世紀前後の時期に比定できる。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい23ねんど とんだばやししないいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成23年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	富田林文化財調査報告						
シリーズ番号	51						
編著者名	角南辰馬(編) 栗田 薫						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000(代)						
発行年月日	2012(平成24)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
なかのいせき 中野遺跡	とんだばやしし 富田林市 なかのちょうじょうめ 中野町二丁目	27214	34° 16'	30' 36''	2010.09.21 ~ 12		個人住宅 の建設
なかのきたいせき 中野北遺跡	とんだばやしし 富田林市 なかのちょうじょうめ 中野町三丁目	27214	34° 15'	31' 36''	2011.03.22 ~ 123		範囲確認 調査
0'' 41''	2011.03.30						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中野遺跡	集落跡	旧石器～中世	谷	瓦、土師器			
中野北遺跡	集落跡	旧石器～中世	ピット、土坑、溝	須恵器、土師器、 黒色土器			

図 版



中野遺跡
土層断面状況(北東から)



中野遺跡
土層断面状況(南東から)

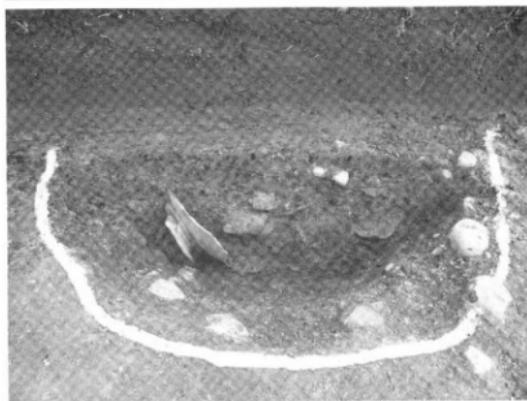


中野遺跡
IV層掘り下げ部分(南東から)

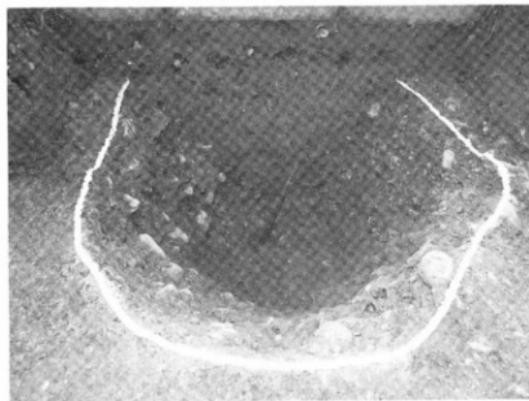




SK 1
土層断面状況(北から)



SK 2
拡張前の土層断面状況(北から)



SK 2
拡張後の完掘状況(北から)

平成23年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書

発行年月日 2012年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 明朗社

2012.300

